

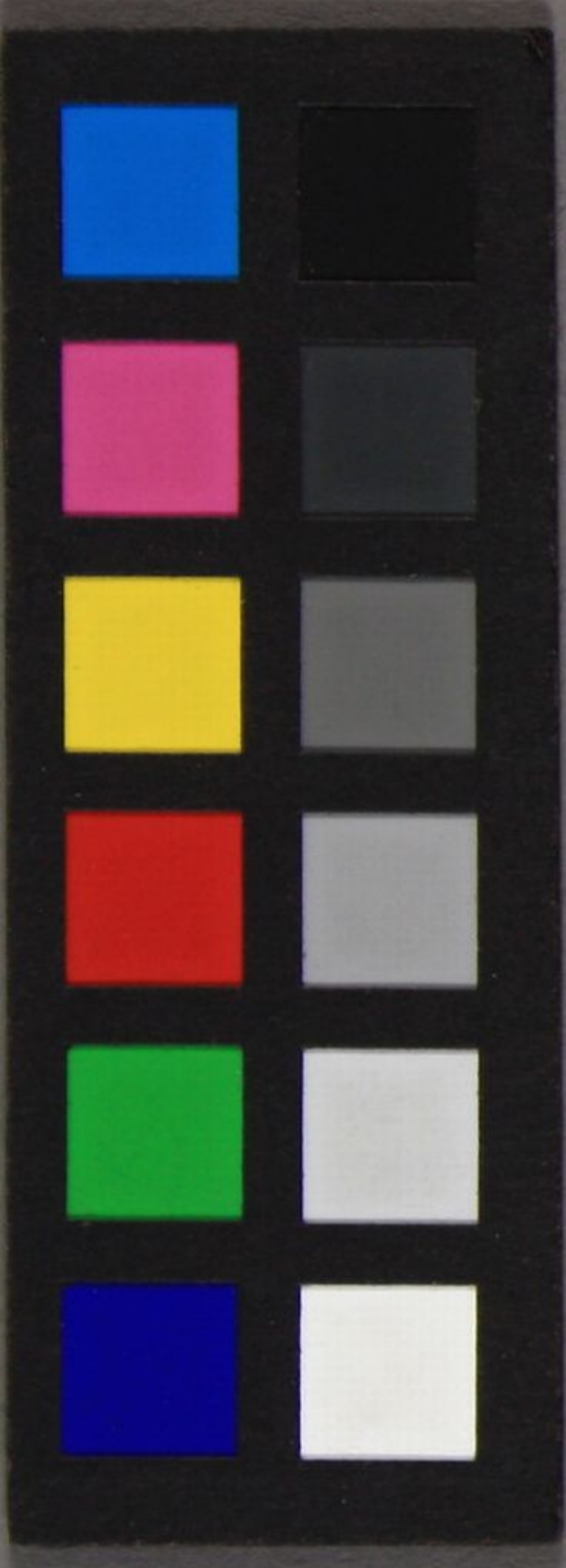
新體詩叢書第二編



心風

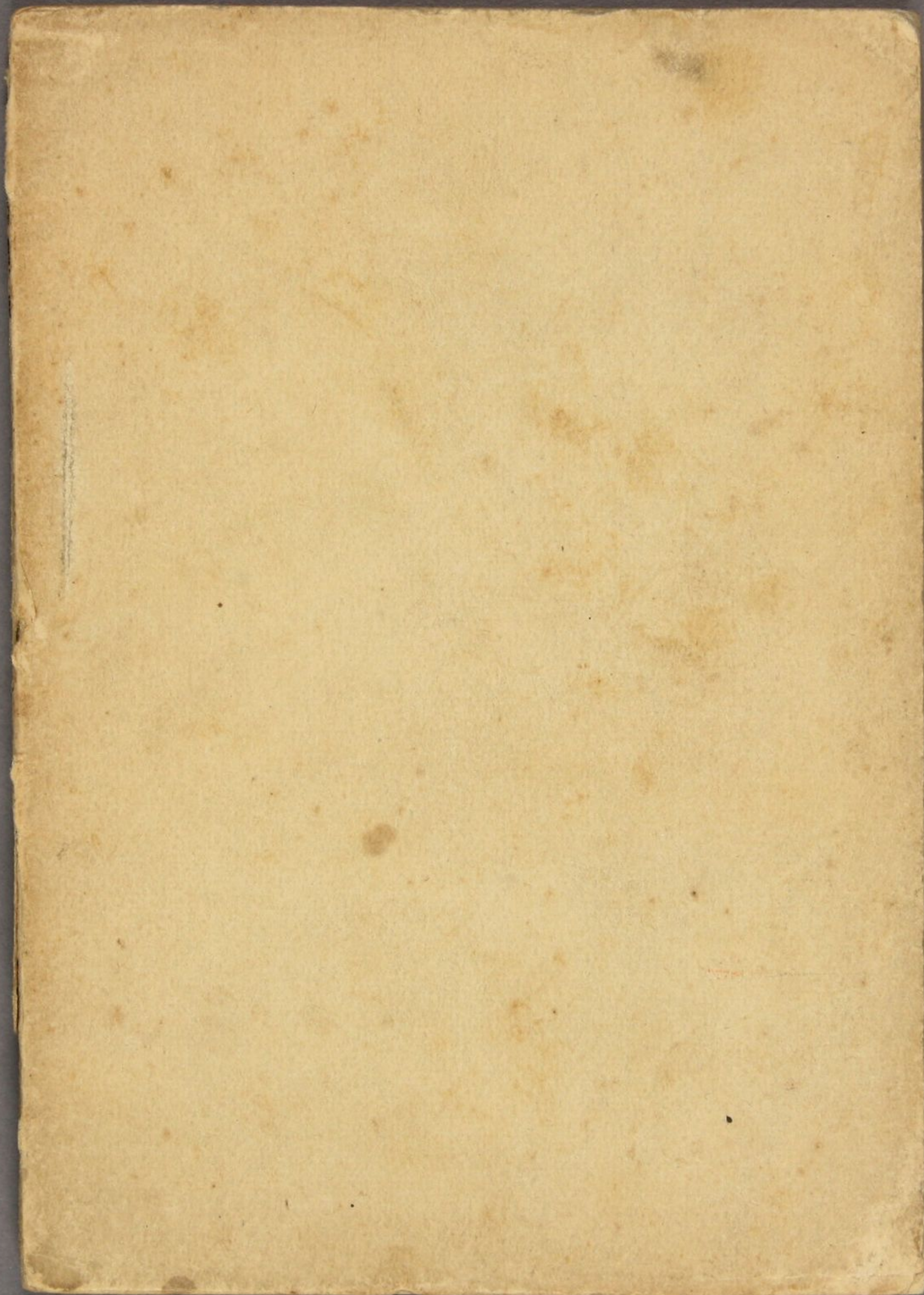
〇 〇 〇

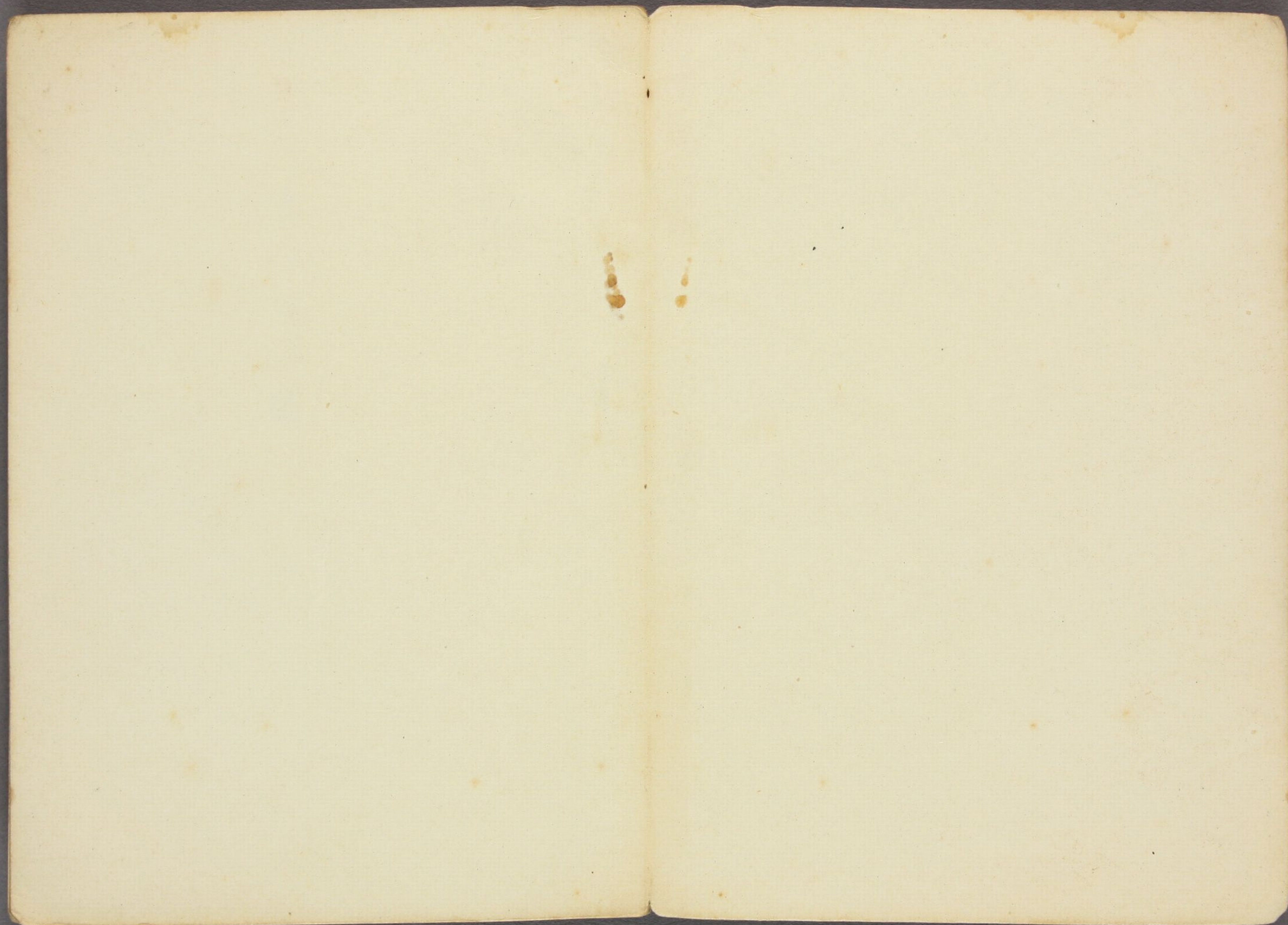
東京
會齋岡崎屋書店



讀書第貳冊

卷之二
風





す

ゝ

風

自序

紅花一枝の春過ぎて一陣の清風生命よりも貴き
夏氣焰々たる天地と相成申候。世には愛に死ぬ
る人も多く有之候へども、又夏の熱さの苦き手
に弄殺せらるゝ人も多く有之候、勿論本集は幽
粹と謂にあらす、清高と謂にあらす、婉麗と謂
にあらされども、書齋の淑女、繁劇場裡の紳士、
徐むろに一集を繙讀し來らは、襟懷自から涼氣
を臆ゆる者あらむか、小弟は之にて擱筆可致候。

洛陽御苑の

ほとりにて

初夏 朝比奈天行

目次

咒の夜天……………一

同 地……………一三

同 人……………二九

五右衛門……………三九

賊 軍……………四二

内村鑑三……………四三

戀の夢……………四六

花びら……………五〇

祝 歌……………五二

雁の音……………五五

琴湖の曙	五七
戀星	七七
心の春	八一
戀のまごころ	八二
蠶	八六
木櫛	八七
露滴	八八
海原	九〇
自然	九三
金鉢山	九七
萬代橋	百七

祇園	百二
情死	百三
鴨川	百四
比叡山	百六
清水寺	百八
音羽の瀧	百八
白雨	百九
螢狩	百二〇
涼風	百二〇
泉	百二一
はちす	百二三

惜別……………百二六
 秋の歌……………百二七
 なくむし……………百二九
 しづのを……………百三〇
 たきぎ……………百三一
 しづのめ……………百三二
 落葉……………百三三
 野菊……………百三四
 柳の影……………百三四
 不朽の祝日……………百四〇

咒の夜

天

遠山寺のかねのねに
 夕雲の果にかくれてど行く
 夕日の影をうちなかむれば
 かほる希望の花つほみ
 開きもやらてしばむこと
 名残すくなく傾きて
 うき世にまよふ悲運兒ひんちの

ちからも盡きてたへやらぬ
足のつかれを踏みしめて
うちあはざぎたる其影を
咲ひてかれたる荒野の中の
尾花の上にうつしけり

うつれる影をなかむれば
あめにくちたる菅笠を
吹きやぶりゆく秋風に
もつれてたれる亂髪

櫛もけづらてれくちりに
緑の色のうづもれて
ものあわれなる面影の
忍ふともなく忍はるゝ
あるに甲斐なき吾身かな

「共和」「自由」を歌ひつゝ
故郷ふるさといてしそのときは
民のなやみを買んため
みなたからの財寶をうしなひて

玉の軒端の虫にくち
壁はやぶれて月ろもる
あめつゆしけき狭庭に
心にかゝる一すじの
生命にまさる吾妹子の
かよわき身をぞのこしおき
涙はらつて一振の
白鞘の太刀おさめたる
袋の緒のくれなひは
せめてもの我心なる

明の鳥のかうくと
啼ひて行衛は白雲の
空さためなくれちいで
世の志士ともろどもに
血汐にはほふ義の旗を
あづまの空にひるがひし
自由をしらぬ爲政治家の
頭首に劍をくはへんと
ひろかに知己をかたらひて

書策したる大望も
自由をのろふ酷政の
暴風のためにはやふられて
われは悲運のろこふかき
高波はゆる北海の
やみのなだなる集治監に
浮ぶときなく沈みゆき
波間をもる、月影に
悲鳴をあけてやるせなき
かなしさいやす身となりぬ

時はながる、溪流の
山はた谷をめぐること
くりかへしては流れゆく
夏のあつさも沙風に
吹きおくられて虫の音の
秋の哀をうたふなる
調も高くふしさを
此世なからの地獄とも
知らて調ふるかなしさに

眠もやらぬ板の戸に
落る木の葉のれとしけし
思へはわれは彼の夜ほど
天を恨みしことあらず
地をは呪ひしことあらず
神に怒しことあらし

あしたの露をふみわけて
虫れとろかす外がい役に
草刈鎌の刃もさどく

かりつくしたる秋野原
おくれさきだち飛鳥の
羽風も遠くなるまゝに
柿色染の雲落て
夕日さひしく照すなり
獄屋に歸る囚人めしうとの
荷車につむ青草を
喰ふ牛馬にねとりたる
かなしき我のつかれはて
歸りてやすむ檻房かんぼうは

せめてもの神の御國なる

たけりくるひる運命うんめいに

此世の望たへはてゝ

涙に空をうちなかめ

くるしむ忘ることよひしも

まだくれやらぬ夕月に

先にうけたる郵便の

封切なからよみゆけは

ふるさとにある吾妹子の

身は秋の夜のれみなへし

かよはきささかの朝露に

さぬぬ其間のかりまくら

八重の汐路をしとねにて

囚屋ひこやの中のかなしかる

此憂きわれを訪はんとて

年ふるさとを立出て

ちからなき身に陸の奥まで

山はた海を辿りきつ

ある草の屋に宿りしか

落ちゆく月に夜はふけて
あらしの音もやみしころ
たちまち發熱はなはたしく
七日を経たるあさまたき
のこしことして歸らざる
どこよの國に入りにしと
宿の主人の涙もて
かきれくりたる其文を
よみゆく我の胸はさけ
どはしり出る瀧津瀬の

涙にうてもわななきて
もちたる文もいつしかに
涙のうみにたゞよひぬ

地

あゝろも我はいかなれば
此世の中に産れしそ
天はもたへて泣くわれの
悲鳴の聲をたのしむか
地はにわかへる胸中の
もゆる歎をたのしむか

たのしくみたる人生は
 吾身をほふる祭壇どころにて
 魔王の使は貧、艱み
 悲戀、惡徳、不義、失敗、
 種々によりほふ其手には
 苦痛の劍をひつさげて
 弄なふりころし殺になさんどて
 焰をふひて立てるを見る

悪にくみせぬ潔ぎよき
 われはなんぢにのろはれて
 戀も事業もやふられぬ

あ、陰陽おんようよなにゆへに
 われを此世にくたせしる
 なんちの人をうみぬるは
 よしあし知らぬ運命の
 のろひの太刀にゆたねつゝ
 くるしむわれのさまを見て

たのしまんどのためなるか
聞け。運命のつかひらよ
生死のちまたに狂ひつゝ
のろふてさけぶ吾聲を

あゝ哲學よなれはいま
狂ひくるひて死の蔭の
闇路に迷ふわれをしも
さどりの門にみちびきて

あかるき國のよろこびに
入らしめよと叫べども
「真如」はわれをあさわらひ
「無極」はわれをもてあそび
「絶對」はわれにあけつらひて
さむかせ雪を捲かごと
痕に白刃のむふこと
重荷に堪ぬくるしさに
悲痛は懷疑の手をのべて
やみの荒野にさそひゆき

狂はしめつゝ、驅廻される
心のうちのくるしさを
知るものとは天地あめつちに
なやむ身の外になく
日頃愛せしいましなへ
今はなやめる心根を
いやすまことの道ならて
なほなやませる刃なり

あゝ吾友の哲學よ

いましは常のもとなれど
くるしむ時の敵よりある
たゞちにわれを離れ去れ
去らすは我はとこしに
魔王を咒ふこゑをもて
なれをもとにもに咒はなむ

あゝ天然よあたゝかき
「美」のふところに抱きあけ
悶へもだへてたへやらぬ

心のうちのかなしみに
 愛のまことをあらはして
 口吻くちつぽなしつくるしみを
 いやしたまひと祈れども
 自然はわれを容れさるか
 われはた自然を容れさるか
 てつてつのしからみ結びたる
 囚屋ひとやの窓にれとのへる
 秋風いたく身にしみて
 夜の女王のてらしませす

光もいとゞものすこし

遠くよせては冴かなる
 月にうろふく波の音を
 ゆたかにきゝし花の夜も
 すゝしくさゝし夏の夜も
 いまは昔となりゆきて
 今宵はいたくもたへれる
 わかくるしみをあさわらひ
 嘯かこときこゆなり

くるひくるひて泣くわれを
いたく狂はすてんねんよ
いましは常のともなれど
悲むときの敵にふある
たゞちに我をはなれ去れ
去らすは我はどこしに
魔王をのろふ聲をもて
なれをもどもに咒はなむ

あゝ慈愛よあたゝかき
なれの心のきよくして
なれの姿のやさしきは
世の憂波にたゞよひて
つかれはてたる我をしも
いくたひとなく救ひにき
もはや世になき吾妹子は
なれのすかたの寫真にて
闇夜をてらすひかりなる
あれのゝなかの泉なる

いのちなき世の生命なる
 愛のまことは神のごと
 けたかく匂ふれもさしに
 やさしくかたる言の葉に
 みどりすゞしき髪の色に
 星かど見ゆるまなさしに
 くもかど見ゆる薄衣うすきぬに
 わもるかごとき振舞に
 顯れぞめてとことばに
 うせじと見たる吾妹子よ

なげきのたねの面影を
 こゝろのれくよ残しつゝ
 雲かゝすみすみに身を乗せて
 行衛もしれすなりしより
 くるしさまさる吾こゝろ
 たへていましの莫りせは
 こゝろの糸の亂れゆき
 もだへひつらと泣叫ぶ
 いまの悲痛ひつらはあらさらむ

あゝ運命よなれの手に
 うはひて去りし吾妹子を
 死の世界より呼れこし
 生きかへさすはとこしむに
 陰府にてなれを咒はなむ

あゝ大事業よいくたひか
 名のいさましきなれの身を
 姿まはゆきなれの身を

もどめて得むとはやりつゝ
 雲ふかくしてうみやまの
 行手もさたかならざるに
 踏みいたしては踏みまよひ
 つひに進退きはまりて
 墳墓ふんぼのしたにうもれたる
 人いくはくか知らさらむ

われ一生をかへり見れば
 黄金も、家も、名も、妹子も

「共和」「自由」のためにとて
 もちたるものを空ふし
 あかなひ得たるは何物ぞ
 業また半ならざるに
 悲運の鬼にとらひられ
 此世の陰府に身はれちて
 こゝろをみれず悲痛のみ
 あゝ運命よわれの身は
 なむちのため倒るゝも

陰府の世界にくだりなは
 地下の義人を呼ひおこし
 霊の世界にたゝかひて
 勝利をなむちと争はん

人

狂ひくるひて泣きさけひ
 悶へもたへひて泣きさけふ
 薄運はくうんの兒ちをあわれめよ
 なむち恵をくたさすは
 たちまち心臓はれつせん

天地の主なる父上よ
 祈れはことふる父上と
 叫べる聲のほからかに
 聞ゆるかたを眺むれば
 かゝやくはかりの面貌に
 くちさる愛の色みわた
 眼にはなみたのみちみてる
 なさけにあまる教誨師
 昨夜もたしへそれゆへに
 やむとなりし我爲に

神にいのりをさゝくなり

祈れはれはやさしくも
 われの邊にちかつきて
 今ちやう醫師のしらせよは
 きみの心臓つねならず
いさな一日をまたてあわれにも
ゆうめい幽冥さかひを異にする
 悲劇を見るに至らむと
 語るを聞きてたへかねつ

救世の大事むなしふして
君先づ地下にくたると
思へは胸もさげんとす
しかはあれども奈何にせん
ことはや爰にいたりては

嗚呼同胞よはらからよ
こころしつかに顧みよ
君かいまより倚るべきは
戀愛、天然、大事業

天地、陰陽にあらすして
のぞみなき世の人のため
きよき血汐を流されし
耶穌エイスのなさけの泉なる
父なる神の愛の手に
身心ともにまかせつゝ
命を夕にまつにあり

運命うむめいまなこを失ひて
人の正邪をわかたねど

父なる神はとこしに
正義の人にくみすなり
慰めたまひとねむころに
すゝむる聲のわなときて
まことにみつる言の葉に
おもひあまれる其折から
囚屋の窓にあさひかけ
照てまはゆきそのかけの
導師のれもにてり添へて
神とも見ゆるけだかさよ

運命まことを失ひて
人正邪をわかたねと
父なる神はとこしに
正義の人にくみすと
此一言をきくしより
さどりの國のほそみちを
得たるか如きことちして
心のなみもれたやかに
胸の鼓動もしづまりて

身のうきこともいつしかに
意味あるものとなりゆきて
心ゆたかよなりけるか
日を経るまゝに嬉くも
病はいつかいやされぬ
妙なる神のみめくみど
讃めたくふまにそのとしも
いつしか暮となりゆきて
あくれば二三の聖代の春
色まだわかきくさらきの

紀元節ともなりぬれば
我等か叫ひし革命の
自由のいくぶはかちをぬて
大地憲上にあらはれつ
特赦のつゆにうるほひて
囚屋のうちをいてにけり
指折みれは七年の^{なとせ}
なかき歳月世をさけて^{としつき}
石をまくらに草のどこ

ひすひてとけし白露の
 きわてあとなき面影を
 心にれくの碑にしるし
 うつることなき御惠の
 神のひかりにてらしつゝ
 疲れはてたる足踏みしめて
 むかし訪ひきし陸の奥の
 わかなき妹子の亡骸を
 とひらひれきし古寺を
 又もとはんどめくり來て

咲ひて枯れたる荒野の中の
 尾花のかけにたゝすめは
 日影もいつかゝくれ行き
 秋風いたく身にしみて
 野邊の行手をふきとじぬ

五右衛門

晝は光のみちくゝて
 夜はあざやかな星の影
 愛とまことの色見ぬて

闇夜すくなき天地あめつちに
不義と知りつゝ不義をして
浮名を流す人々の
多からむとも思はへす

かしらきやうらいに虚榮の玉かさり
口くちに不爛ふらんの舌ありて
平和を歌ひ。手にはまた
義の彈琴をかきならす
しるく貴き指さきに

ことくにうばふ帝玉は
不義なる人と思はすや

眞珠またま、白玉しらたま、ちりはめし
清涼殿のあさ夕に
黒髪ながき姫君の
指にみだるゝ琴の音
愛あひにうゑたる哀あはれなる
女おんなをこるす大臣おほをみは
戀ぬすびとと思はすや

賊軍

勝ては官軍負れば賊と
熊笹かざす童の
里の小路を歌へゆく
三々伍々を見よや君

肉の林の血に碎て
翼れさめて眠る鶯
酒の泉のあわき香に

浮れ狸のうまゐをは
驚かしみん攻太鼓
大銃、竹鎗、薙旗
樹てゝ怪しき世界をぞ
打たひらくる強者は
田舎漢いなかおことなるどきの
彼等ならずや見よや君

内村鑑三

不義を憤りて泣叫ぶ

聲あめつちに轟けは
 天に靈火は燃ゆるあかり
 地に洪水のみなきりて
 浮世のなかの汚れをは
 洗ひつくさむちからこそ
 義人の君のいのちかも
 一たび筆をくもに曳き
 文のはやしに別けいれは
 吉野のさくら不二の雪
 いろ香やさしき天然を

くちぬ思想の綾として
 高きしらべにうたふなる
 詩人の君のけたかさよ
 浮世を咒ふそのこゑは
 神にさんびの歌となり
 偽善をあさける其筆は
 正義をしゆる劍となる
 その誠意は大神を
 やとす黄金の宮居よて

世はくちぬるも朽さらむ

四六

戀の夢

春の野はらをうらくと
吹く春風にれくられて
さするふ我のいつしかに
ひともと櫻咲きにはふ
花のこ影にやそらひぬ
戀のあわれをうたふなる

雅歌のひとまさとりいで
讀みもてゆけは緑野の
春のはひにさそはれて
つひまどろみぬ草の上よ

香に匂ふらむ花雲の
たなひき染めしかあたより
うすくれなひの羽衣に
身をよそはひつ天津女の
ひらくひらと顯れて

四七

にはふ羽袖につゝみたる
 光もきよきまなだまを
 わか懐にのこしれきて
 又ひらくゝとのほりゆき
 雲隠れにぞなりにけり
 のこれる珠はあたゝかき
 春風の手にくだかれて
 わか胸の中にいりしより

ひやくかなりし我胸の
 あつくなるまゝ眼醒れは

夕暮ちがき花の上に
 ひつれむつろふ蝶ふたは
 如何なる夢をみたるらむ
 一夜の露をしのぐべき
 宿かることも忘れつゝ

花びら

朝露匂ふ春の野に
さするふ蝶のもろつはさ
花の色香にうまるまで
うかれうかるゝ樂さよ
たのしくあろふ蝶の身の
翼に花の香をうけて
霞の綾に乗りて行く

はては黄金の雲井かな
笑をたゝへて打仰く
處女心のけたかさは
散りかゝりくる花片の
黒髪にれくさまなれや
又ちりかゝる花片を
袂にうけて眺めやる
心の緒琴亂れけむ

うるみろめたる眠眸まなこや

五二

たもとにむすふ露の玉
とくるいろなき處女子の
うらゝなるこの春の日に
なにゆへ秋を忍ぶらむ

祝歌

上城河合両兄弟の合歡の喜を祝さん

とて花と雪とに寄せて讀める

吉野の里の櫻花

うすくれなひに染めいで
八重の霞にほへるは
大和淑女のすかたかも

千代に聳ゆる不二の峯
つもる雲井のしらゆきに
旭の影のまはゆきは

五三

大和君子のすがたかも

五四

高峯の雪のなかりせは

吉野の櫻いろあせん

吉野の櫻なかりせは

高峯の雪やはへさらむ

花と雪とのなかりせは

大和錦もあらさらむ

君子淑女のなかりせは

大和御國もあらさらむ

千歳の雪に八重の花

かたみにそへる愛の香に

天の岩戸をいたもふ

神はむすふの神なるか

雁か音

草の枕にかりねして

五五

あわれ身にしむ旅衣
 戀しさまざるふるさとの
 めめぢをかよふ吾魂は
 さきだちませし父君や
 いとしき母の亡骸を
 葬りたりしはかのべを
 夜すからめくりあかすらむ
 みぢかき春の小夜更けて
 寐耳にねへる雁か音に

驚かされて眼さむれば
 燈火のかけかすかにも
 ありし昔のなきひとの
 哀をかたることくなり

琴湖の曙

匂ふ八代重の薄霞
 月の光をとじこめて
 れはるにふけし春の夜の

牧場くはうちつとふ
 羊のどこの若草の
 みどりのかほり清高して
 葡萄の酒に酔しこと
 手枕にふす飼人の
 天津使を夢にみて
 羽衣の香をねもひねの
 夜は東風のみぎ吹通ふ
 薄花染の春の色

つねに砂漠のかせすこく
 地中海よりたつくもは
 あつさに雨を吹きくはへ
 ねむりゆたかに臥す夜とて
 いとまれなるに此頃の
 春の心のやさしくも
 なさけにみつる暖き
 玉の腕にはるかせを
 つげの木櫛とかざしつと
 自然の床にもつれたる

雲と風との亂髪を

すきよよめたる春の色

都は春のちりふかく

ひとの心もうみはて

ひかし榮光さかえとほこりたる

神の宮居の彫刻の

眞珠白玉しらたまきらめきて

黄金こかね百金かゝやけど

住む神もなき亡骸の

最とほこりかに棟高く

空に聳ゆるエルサレム

八重に霞をれりなせし

曉ちかき朧夜に

いかなる夢をむすふらむ

花の都はれひぬるも

自然しぜんはつねに若やきて

神のみむをあらわせど

浮氣心のたのみなき

人は自然にねどるかも
見よエルサレムに程近き
橄欖山を忍はする
霞に匂ふ雲の色
黛色染に黷きて
傾きそめし月影に
ひとしほ色は増れども
都は夜半の雲深し
都の夢のさめぬまに

牧場のはてに月落ちて
山の姿もみづらみもの
鏡と見ゆるみづのれもに
霞と霧の綾織の
よるの衣にねほはれつ
苦屋をもれる有明の
黄金の色にをたゞよはず
漁村きよとんの空もれほるにて
あかつきさらかき明星の
晝の使をまたんとて

天降りたまひし如くなり

沖に泛けたる漁舟

けむりとなりて雲に入る

かゝりも今は消行きて

明方なかき曙の

しのめつぐる鳥の音に

潮は磯にそくけども

獲物もあぬら寂しさに

すなとりびとら力なく

浅瀬に舟をちかつけて

仰くるもなく眺むれば

ひるをてらさん御使の

光はよるをはなれけり

東の空にそめいだす

薄紅のあさやかに

よるの帷はさぬぬれど

霞に匂ふ曉の

光に浮ふ花雲の

翫さるめて美の神の

さすろふ國をしのはする

曙色をたゞよはす

カリラヤ海の水清く

玉の緒琴にかたどりし

造化の御稜かしこみて

万代までも濁らしな

二十四絃の琴糸の

ろれにはあらて水の面に

寄せては返しかへしては

またも寄せくる漣に

美の御使の羽衣の

羽風のことくはからかに

匂ふ朝風くわたりて

天津調の氣高くも

心の糸に響きぬる

美の音をきくからに

豊葦原に在りときく

琵琶湖の空もしのはれぬ

のほる朝日にいろまさる
 花曇なる花雲の
 裾よりれこる朝風は
 曙染にいろまさる
 八代重の空を吹きはらし
 へルモン山を掩ひたる
 花の香に酔ふ薄霞
 さびて行衛は白雲の
 巒く峯のゆるさなく

いと神寂てろひねたち
 天津御國の美の神の
 逍遙^{ささろ}ふ御園と見ゆるかも
 天と地とのけじめさへ
 絶へし高峯にたなひける
 その白雲のけたかさ
 水清くして魚躍る
 名に負ふ琴湖の曙を
 晝の使に先立て

望まんものと頂に

まもりたまひし美の神の

あくるをまたて白衣しろぎぬを

忘れて去りしことくにて

瑞穂の國にありときく

芙蓉の雪もしのはれぬ

われにもあられて天地あめつちの

美の懐にやどりつゝ

花の香を汲む美酒うまさけに

酔る如き心地して

うかれてうたふ詩の卷の

神の聲とろ聞ゆなる

自然にちかき人の子の

笑顔にうかふ漁舟

あらるゝ波もなき磯の

白砂はくさの上によもすから

つかひあかせし魚網を

かはかさむとて廣けたる

後にうしろみゆる人影の
 凡人たゞひとならぬたもひして
 振り返りけるかなたには
 緑色なる垂髪を
 風かぜのまにまにく靡かせつ
 レバノ山レバノ山のろれよりも
 高く秀ひたてし額ひたひぎは
 匂なざしふか如なき眼まなこ眸まなこに
 仁義じんぎの光ひかりほのめきて
 やさしくむすふ口くちばしに

りんたるところはの見みねて
 神かみとも見みゆる人の子の

霞かすみか雲くもに身みを乗のせて
 神かみの宮居みやゐの寶座たからざより
 あもりたまひし如ごとにて
 くれなひ匂なふ糸織いとおりの
 衣きぬに旭あすの色いろ添そへて
 ふたつに見みゆる仁じんと義ぎの
 道みちを一身ひとみにとゝのひし

徳の化身のけたかさよ
 かれ一聲を嘯かは
 忽ち海もあせぬらむ
 愛の涙を流しなは
 鬼神も袖を濡すらむ
 之を望めはのぞむほど
 海原よりも豊にて
 思ひはかれればはかるほど
 蒼空よりも貴しな

曾てひとたび斯神の
 玉を轉はす言の葉を
 猶太の野にて聞しとき
 心の戀の糸に觸れ
 忘れかたくもありけるに
 今朝仰きみる面影に
 一しは戀は優りつゝ
 尙ほ慕はしくなりてけり
 春の心は斯神の

姿をかりて見ゆるらん
 神の心は此春の
 姿によりて示されん
 妙に貴き斯神は
 春風のことちかよりて
 今より我にきたれかし
 其業よりも最貴き
 人を漁るものとせん
 天の美音を聞かこと
 宣給ふ言のうれしさに

身をそ献けて従ひぬ

戀 星

空おほるなる花の夜に
 酔へるかことき星影の
 光は戀のまことかも
 色ほからかに夜もすから
 燃るこゝろのかゝやきを
 誰そ彼れかため免しけん

狂ふこゝろの春の夜に

静にはなつ花影の

かほりは戀のまことかも

ゆかしきまてに夜もすから

生命いのちかきりのかんばせを

誰たれる彼れかため免しけん

天あまは群る星となり

地ちには雲なす花となる

ちからはねなじ天地あめつちの

情なさけにみつる美の神の

なかつ涙なみだとつく息いきの

陸くさかと雲井くもいにほふなる

神はひとりひとに在せとも

みわざわざになれる天地あめつちの

ともなりかぬるを奈何いかんにせん

哀れはじめに隔へだてらる

こゝに戀こひあり生命いのちあり

こゝに死もあり涙あり

夜すがらなやむ花影に
色れほろなる群^{むら}星の
宿らむとして宿りえす
霞に戀の路たへて
天と地とは狂ふなる
心とゝろを離れか知る

心の春

神の光はてりろへと
悲哀の風にすさひにし
心の野原いかなれば
あたゝかき春となりけむ

美しくしき神をけかれなき
心の中につゝみたる
〇〇子の影をやとすとき

世は花園となりけり

八二

戀のまこと

「深山の春もれひぬれば
のこる霞をなこりにて
都の空にちるはなよ

人げとだへし山かけの
岩間にさなく吾さまの
清水にうつるす寂しさを

世の戀人に知らせかし」

「湧ひて流れてすへつひに
世の戀人の口紅の
綿盃うすにしたゝる眞清水よ

日毎に訪ふて泣くわれの
瀧津涙のしけくして
やつれはてたる此様を
とはすかたりに告よかし」

八三

「運命てふ神の御使か
春の名残の花の香を
つれなくさるふ山風よ

うるを清水にやしなひつ
戀てふ神にさゝけたる
さよき骸にれくちりを
ふされくりてよ彼の人に」

「苦むす岩よこゝろして

彼の世に彼れの訪ひきなは
わが死のさまを語りてよ

もぐらのこして輝ける
戀のまことは戀ける
白雲の上にはりゆき
常世の國に入りにしと」

蠶

玉襟せし處女等の
摘んであたふる桑の葉を
くろふ蠶もふたなぬか
みなぬかふれば親達の
免したまひし彼の君と
契る妹背のふるまひに
着飾る晴の白絹を
織なす糸を出すらむ

木櫛

ふるとしつさを吾背子の
病の床にみこもりて
愛とまことの兩色を
糸織縞に染めなしたつ
木櫛にむすふ黒髪の
みとりも塵にうもるまで
送りみもせぬ姿こそ
人目をいとふ幽谷ゆうこくの

櫻になひく八重霞
浮世を畫く風情なるらむ

露 滴

闇をはなれて咲く百合の
花の香にあこかれて
雲の宮居をのかれいで
あもりてけりな汝の手に
あわれやさしき此花よ

なれのすかたは朽ぬるも
やどれる神はどこしえに
わか真情まこととかよふらむ

われをまもりて夜もすから
かすかにてらす星影よ
明るをまたて夜あらしに
花もろどもに散りゆかは
戀てふ美しくしき神ゆへに
死せりと告よ世の人に

海原

よせてはかへす荒磯の
波にくたくる月のこと
たまの腕をむすびあひ
うせぬるひとは若干ぞ

浮世の花にあこかれて
狂ふころも朧夜の
岩か根の波とくたかれて

うせにしひとは若干ぞ

雲を隔てしきほろしの
黄金の山を夢にみて
八重の汐路に棹さしつ
れぼるゝひとの數知れず

花は櫻とうたひつゝ
おどる腕かひなに太刀ふりて
海を血汐に染めたりし

人はいづくに迷ふらむ

月にうたひて花に酔ふ
浮世の果はかさりなき
死の海原にちかつきつ
波なき底にしづむらむ

自然

ふりわけ髪の處女子の
笑顔にみつる愛の色
まことにあふる言の葉の
さよきは花の生命いのちなる
神のすかたを宿すらむ

かはりゆく世の波の上に
うつるふ松の深緑り

かはらぬ色はものゝふの
忠のまことの香に匂ふ
いのちなき世の生命かな

九四

入江の水の濁れるも
知らて浮べる水鳥の
汚れにしまぬこゝろこそ
うきこと知らぬ稚兒の
乳房にねむる姿かな

花に眠りて月に飛ぶ
よるの鳥の聲きけは
身を雲水にまかせつつ
色則是空とうたひゆく
比丘の教偈やつたふらむ

轟さわたる雷や
たけり狂ひる雨風に
櫛つられつ浮雲の
上に聳えてゆるきなき

九五

山の姿を聖人ひちりなる

九六

天をけりゆく荒波に
くつかひされし真帆白帆
千尋の底に沈みゝれば
波うきたたぬ渡津海
静に狂ふ義人なる

金鉢山

新潟の知人鈴木翁なる人死ぬわれ之を金鉢

山と云ふ墓地に送りて悼みたる者

春には花の色にいで
秋には月の影に澄む
造化の勢力ちからみちみてる
あめつちの手に導かれ
六十路の坂の頂に
登りさぬれば入相の
鐘の響に夕空の
生命いのちの光うせにけり

九七

世は村雨のしげくして
やむとさもなき秋空を
はうくてらせし太陽も
何に別れをいとひけむ
名残をこめし夕榮は
しばし雲間にまたたきぬ

暮てはれにし望の夜を
冴かにてらす月影を

天なる君の褥にて

浮世はるかに見たまはゞ

今宵盈ちたる影白き

月の光をたのしとて

世の人みなは浮るらむ

月の蕙の酒の香に

背子も妹^{いも}子も夢に入り

笑みたたかはす家あらむ

月の高さを仰きみて
塵よりいてし身を厭ふ
新歌人のなくてはや

橋の欄干てすりに袖振りかけて
片破月の其戀を
月に泣く人なくてはや

共に手に手を取交し

海に入らむとする人も
月に少時はたゆたはん

鐵のしかみ結ひたる
囚屋の中の罪人も
月にむかしを悔るらむ

夕と朝とをつなく可き
よるの闇路も明月の
光に晝をしのはする

彼世は聖國ならぬかは

百二

一日をれきて明けぬれば

常盤の緑り女郎花

結梗刈萱折りそへて

棺を綾に色とりし

死出の旅路の花の香や

水色染の伴衣ともぎぬも

時雨に濡れて朝寒さ

魂亡き人の野邊送り

通る棺を路すから

門邊にいでて見送れる

處女の眼にも涙あり

また花ならぬ蕾にも

雨と風とに袖濡らす

秋の哀をかこてるか

葭簾垂れたる格子戸を

洩れてきてえし手すさびの

百三

またうらわかき琴のれど
老ひさきななき黒髪を
弾きみたしたる指先に
「死」よりの文はとらさるか

桓根に朽る枯葛の
うきこと知らぬ天使の
心なき手を合させて
「死」をぞ佛と教へつゝ
稚童におかまする

母はまことの人なるか

れくり來ぬれば秋風に
常世の空は吹きはれて
時雨の雲の影もなく
寄せくる波のくたけては
浮世の岸を琴糸の
かなつりかはす音きよし

松の調と波のれどに

讚美の歌の合されぬ

百六

魂は天國みくにと知りつゝも
土に埋れるさま見れば
聲もしとろに絶やらぬ
悲しさ雲どたなひきて
黒染色の空黒く
金鉢山の涙雨
こやみもあらず降しきる

萬代橋

新潟港頭連々たる白蛇の如きものを見る

曉ちかき夜嵐に
泣きからしたる虫の音も
ほろりて行きつ淺茅の
露のしけきに脛濡れて
すゞしさまさる塵の身の
辿り來ぬればほからかに
夜の衣はぬきつれど

百七

かきみと見ゆゑ薄霧よ
 彌彦山（やま）もうちけむり
 ねむれるまゝの姿にて
 眼醒めぬのみか舟江津の
 みなどによする朝潮（あさしほ）に
 光そゝかむ明星も
 りの面影をかくしつづ
 晝を照さむ御使の
 ひかしの空にけたかくも
 登るすかたを仰かむと

いましはらくろ待ならむ

ひかし希伯來（へふろ）の歌人に
 悪魔（あくま）の使とうたはれし
 エデンの園の其蛇の
 昔を悔ひてとこしえに
 橋なき河に身を架けて
 千萬人（ちよろつひこ）を恵みつゝ
 過越方の罪業を
 贖はんとて幾度か

罪の古衣ふるきぬぬきすてて

新衣着たるやちひろの

雲井を仰くしるへび白龍と

見ゆる姿の萬代橋

黄金にわける貴人も

名利にはしる商人も

疲れはてたる乞食も

濁江にすむ歌姫も

浮世をかこつ歌人も

笑顔に泣ける浮女も

學わかひに倦うみし青年も

廻りつかれし憲兵も

此大川を渡るとき

なれの恵にあづかりて

あした夕邊のうつくしき

情にみてる天然に

胸のくるしみ醫やすらむ

あゝ此我も清くして
世の塵たたぬ汝の上に
少時やすらひ汚れなき
雲を枕に天然の
美の懷に遊ばんと
あさまたきにぞ來るなり

祇園

花ともみゆる歌姫の
玉づくりなる高樓たかどのに

夕邊の星と群りて
うつ小鼓の響には
雲井の雷かみもれどろかん
かなつる三味の調には
月の心もくるふらむ
袖ひるかひす手躍は
燭の光を酔すらむ

情死

いつわりれはき世の中に

男の愛に身をささげ
親、兄弟もかひりみす
世をも人をもうらますに
まことの愛のくれなひに
浮名をなかす浮女の
心の奥を誰れかする

鴨川

ほのかに霞む春なれば
光りてらさん戀星も

酔へるかことく見ゆるかや

川端にたる青柳も
糸よりかけし春風に
ゆられゆられて靡くかや

水の流も夕霞
たなひくなかを一筋に
石にせかれて通るかや

二條の橋のたゞなかに
頬かむりせし小男の
流れ見てたついふかしや

比叡山

都は塵にうもるれど
比叡の山に神ぞすむ
世はいつはりに充れども
比叡の山はけたかしな

都娘よこころして
天津乙女となりたくは
比叡の山をならひかし
浮世の塵にけかれすに
雲に聳ゆるたつとさを

都男よこころして
天津聖人ひじりとなりたくは
比叡の山をまなべかし
此世の浮沈ふらんよそに見て

千代に變らぬたつとさを

清水寺

清水寺の松風を

夏の夕にかよはせて

君とわたしの書よみを讀む

書齋しよさいのうちに招きたや

音羽の瀧

君。からうたを歌ひつゝ

しはし此方こなたにまちたまひ

わらはゝ行きて水團扇

しはし冷さむ音羽の瀧水

白雨

君。傘を持給はずば

あひあひがさにして行かむ

まことにあらぬ事ればき

世間の人の口の端は

なぞておろれん神ぞ知る

二人の中の潔白を

螢狩

招かるゝ螢もあるに
蚊遣かな

涼風

河岸にたちたる束髪の
處女の鬢のはつれ髪に
涼しき風の吹きかよふ

柳の影の長椅に

ロゲロエフンの詩集讀む
男は彼女を見上げけり

鴨川流れ水涸れて

せかれせかるゝ其音も
あつさにたゆむ思ひかな

泉

夏のあつさを忘るべき

泉は野邊にわきいてぬ

百三

憂世の憂を忘るもべき
愛は處女のうちに在り

暗き一夜を照すべき
光は月のものなるを

常世に朽ちぬ生命ころ
げに天地の泉なれ

はちす

菅田の里の夕風に
またゝきたりし蚊遣火も
ほろくなりゆく短夜の
明方ちかき池の面に
うつれる星の影さよく
浮葉の月の影しろし
たちまちみゆる白雲の

百三

隼さ初めしかなたより
薄紅の羽衣に
よそほふ露の珠飾り
みどりすゞしき黒髪を
波うつまゝになひかせて
玉ときらめく明星を
香を吐く口にふくみつゝ
ろの面影はさやかに
月をみかさしことくにて
晨の空に顯れつ

はちすの上になれたもふ
美しき姫のすかたこそ
天津使か美の神か

晝をてらさん御使の
東の空にのほるとき
姫のすかたは何時しかに
浮葉かくれに成りゆきて
池のはちすの三つ二つ
そのあとよりそ匂ふなる

惜別

夢とうつゝのさかひ路を
たどる時雨の小夜なかに
去年の古巢をしたひきし
尸の啼音のきこゆるを

明るを待たてもげふねの
烟のはてに吾友の
花のすかたを隠れゆく

憂事しけき世の中と

思ひこかれて我ならず
現のなかの枕邊に
又一聲のねとつれて
魂れどろかすかなしさよ

秋の歌

ゆびわ

望みいたきて春死にし

花の心も秋の來て
いさかへりてぞ實を結ふ

林檎の花のちりしとき

はづかしかりし吾心

今は身れもになりけり

葡萄の蔓の葉隠れに

とりかわしたる此指輪

昔を今にかたるなり

わゝ君ゆへいくたびか
義理となさけに隔てられ
死なむとせしう苦しかる

なくむし

たまをまるばす虫の音は

塵よりいてし歌人の

ひくき心にまざるてふ

高き調にうたふよな

玉の宮居の月の宴
花の薙にうちつとふ
きらひやかなる人々の
いかて知るらむ彼れの心を

しづのを

露踏みかへる賤の男の
かしらに星のきらめきて
今日のつとめを祝すなり

なさけにみてる其妻は
天の使の心もて
門邊に星をかろへつゝ

暮れまさりゆく秋の夜の
野路をいろぐ賤の男の
歸りをまてる姿かも

たきゞ

賤の男の

ましはかる日を

おこたりて

ゆきふりさなは

いかにとすらむ

しづのめ

さやかなる

月につかれや

わすれけむ

うたひつゝゆく

野路の賤の女

落葉

褥のうへに座をしめて

祈さふくる其時に

窓の戸たたく音するは

天の使の羽音はぶこかも

野菊

としはもゆかぬ妹の
野菊一枝手折りさて
振別け髪をつかねたる
れとなしふりの稚兒鬪に
かさしなからに打向ふ
鏡の影のあひらしや

柳の影

夕日はにしに傾きて
名残をきゞの霜枯れし
山はた野邊に染めいたしぬ

迷ひくらせし夕鳥
秋のあわれをかこちつゝ
ねくらもどめて行果は
夕雲のすそに隠れゆく

片山里はしもかれて

秋の眺もうつろひし
日暮しきなはてみち
居村にかへる處女あり

れくしもこほる黒髪の
吹く秋風にしからみて
夕日をあはく面影に
うつくしき神のやとります
きえなんとして照返す

日影はしばし餘念なき
處女の姿にたゆたひし
こからしの音にしつみゆく

ゆくてもとほき繩手路
夕暮れ深くなりゆきて
妬むか花と見まかひし
處女の見えわかす

日あしみちかき初冬の

くれてしはしは薄暗き
よるとなりけるひんかしの
雲くれなひの香に匂ふ

月の光のかくやきて
おく霜ふかくなりゆけは
此世の闇もいつしかに
高峰を越えてきえにけり
夕暮さむへ空さえて

處女のすかた霜白く
月の光に身をあひて
辿りて來ぬる氣高さに

繩手もつきて村ちかき
此方にたてる枯柳
そよけは月の影すみて
霜にふすなる草の宿

月の光に天使と

みえし處女のいつしかに
柳の影にさゆゆきて
夜は月高くしもしろし

不朽の祝日

冬の御空かすめる天の戸も
登る朝日の影きよく
てらす光の香に匂ひ
あらわれたもふ神々の
さらひやかなる御出立

今日の佳節を御祝の
行幸をれくる樂司
かなづる調ほからかに
かすみそめたる薄霧の
雲とはれゆく朝ほらけ
駒の歩行のしづくと
芙蓉の峰にれりたもふ
神の行幸の伴廻り
畏みつつも見まもりつ
行手を拂ふアブラハム

イサク、ヤコブにおほひるめ大日雲姫
國常の尊まで
立烏帽子に直垂や
佩ける黄金の御太刀も
最どかしこくろ見ぬまつる

御先拂の伴廻り

路をさよめて通りゆく
あとにつゞきて行幸ある
君を守護したてまつる

近衛の武士のぬきつれし
くもりなき義ぎの業物わざものは
神寂てこそ見ぬにけり
なかに童顔どうかんかくはつ鶴髪の
御馬ちかき侍従一騎
いと嚴にささけゆく
智慧の鏡のあきらかに
てらす律法のくもりなき
生殺與奪の權威もて
陰府と此世をすべ給ふ

君は白馬はくばに跨りつ
 白衣はくきの袖ひるかひし
 たぐる手綱の唐錦
 ふくむ轡のれとたかく
 霞の高峯雲の洋
 波なき四波にひゞくなり

その御後に見ゆめるは
 審判さはんを御子みこに委ねたる
 父なる神の乗りたもふ

雲をしとねの大御輿
 星の玉簾捲きあれば
 かさす桂の日のかんむり
 愛の聖姿みよかた見わたもふ
 アナ尊とみちすから
 仰く孔子の唐衣からころも
 慈悲を織なす忍辱の
 釋迦の着飾る法の袖
 黄色こやしよく白色はくしよくいろくしの
 入のおもては異なれど

古今東西れなしきは
 天をもととなる人の道
 守りて死せる藤樹や
 仁齋、ブレット、ソクラテス
 すまむ御輿の後押へ
 雲の通路へるくくと
 芙蓉の峰にれりたもふ

八重にたなひく白雲の
 峰にいはいの神集ひ

天津彦つらにつらされる
 うの白衣しろぎのかやきて
 うらまに見ゆる雲の原
 ふりさけ見れば藍染の
 空にわらはるかづくの
 女神は鶴にまたかりつ
 翳す扇の花模様
 紅ひ匂ふ舞の袖
 ひらくくひらと裏返る
 かせに色ます朝日影

まばゆき光へたてにて
 樂司のかなてたる
 玉の小琴のれとたへに
 しらべりあわき天津あまつ籟うえ
 歌の神達はからかに
 うたひなかせる大和歌
 樂かぐの調にかよひつゝ
 最とゞ冴かにきこゆけり

「天津日の御嗣をすてて神の子の

孤兒となりて世の中に
 天降りたもふや輝ける
 眞珠白珠ちりばめし
 帝の館よそに見つ
 いともいふせき草の家の
 驢馬うまの住家を假の宿
 槽まよのなかの夜すからを
 悉みたもふ父君の
 月の光もあらわさて
 けかれればひつ愛の袖

涙のつゆに濡れし夜も
 今は昔のゆめなれや
 首尾好くサタナに打勝て
 天津御國のもとをすね
 凱旋ありし大君の
 途出の日をそとしごどに
 祝ひ祭るが實に慶よろこびの
 祝ひ祭るが實に慶の
 かくはからかに謠はれぬ

涼風終

明治三十一年八月廿日印刷
 明治三十一年八月廿八日發行
 明治三十四年五月十日再版
 明治三十九年九月三十日三版

複製
 不許

編纂者 育英社
 右代表者 河合卯之助
 發行者 東京市神田區維子町三十二番地 山本鏢藏
 印刷者 東京市神田區小川町一番地 多田榮次
 印刷所 東京市神田區小川町一番地 愛善社

發行所

東京市神田區
 維子町卅二番地
 同市本郷區
 本郷六丁目

岡崎屋書店
 特電話本局一四八番
 岡崎屋書店
 電話下谷一二七二番

各國語獨修書類

露	獨	佛	英	朝	日
<small>小柳津邦太先生著</small>	<small>山口造酒先生著</small>	<small>山口造酒先生著</small>	<small>山口造酒先生著</small>	<small>松岡馨先生著</small>	<small>元木貞雄先生著</small>
西	逸	蘭	吉	鮮	清
亞	語	西	利	語	英
語	獨	語	語	獨	會
獨	修	獨	獨	修	話
修	全	修	修	全	獨
全		全	全	全	修
郵	郵	郵	郵	郵	郵
正價	正價	正價	正價	正價	正價
稅金貳	稅金貳	稅金貳	稅金貳	稅金貳	稅金參
貳拾	貳拾	不拾	不拾	不拾	不拾
五錢	五錢	五錢	五錢	五錢	五錢
錢	錢	要	要	要	要

新 体 時 叢 書

第一篇

き

、

波

全一冊

正價 廿 錢

さくなみゆき交ふ真州白帆眼前にあるの想ひあり

第二篇

せ

ど

風

全一冊

正價 廿 錢

此の集を播かば襟懷白から涼風を覺ゆ

第三篇

松

む

し

ま

正價 廿 錢

一讀清爽真に松虫鈴虫を聞くの想あらしむ

第四篇

都

の

よ

ー

正價 廿 錢

柳櫻こまませて 春の景色を机上に見せしむ

新 刊 廣 告

Lalingvo. Inoternacia
Esperanto

エ ス ペ ラ ン ト 獨 習

加 藤 節 著

全 壹 冊

正 價 貳 拾 五 錢 郵 稅 貳 錢

全 世 界 通 用 語

講道館師範加納治五郎先生著

訂正
六版

柔道大意

全

正價金廿五錢
郵税四錢

講道館四段有馬純臣先生著

深遠なる利

靈妙なる術

本書悉く説明せり

講道館四段

通俗

柔道圖解

全

正價金廿五錢
郵税四錢

有馬純臣先生著

何人もわかる柔道の圖解総かな附

19
2
8
0
9

